

山と博物館

第31巻 第7号

1986年7月25日

大町山岳博物館

特集 日本水彩画会 長野大町展(7/20~8/26日)



古池や 小山良修

日本水彩画会

長野大町展の共催

社団法人日本水彩画会と共催で、七月二十日~八月二十六日まで、同会展長野大町展が昨年につづき大町山岳博物館で開かれる。出品作品は、名実ともに日本水彩画壇を背負う画家、内藤秀因、小山良修、石川達三ほか五〇余名に、長野県下在住の同会所属の会員、会友ほかの作品を加えて九八点ほどである。

日本水彩画会は、大正二年(一九一三年)大下藤次郎、石井柏亭、中沢弘光、丸山晩霞ら六四名によって創立され、その後、隆盛を続け、今年も五月に東京都美術館で第七四回展を開催した。

現在、会員二七一名、会友一八二名、全国各地に五五支部をもつ日本最大の水彩画団である。長野県下には、長野、松本、上田、諏訪に支部があり、会員二三名、会友一二名、一般出品者も毎年九〇名前後おり、一画派としては県下最大である。

歴史と伝統のある日本水彩画会は、広島、名古屋等で毎年地方展も行っているが、人口三万の地方小都市での開催ははじめてで、決定は、日本水彩画会としても英断である。

昨年、会期中一ヶ月間に二万七千人の入場者があったが、北アルプス山麓の自然を求めて来た人々に、深い感銘を与えたのである。

今年の入場者数目標は三万人とのことである。

日本水彩画会は、大町展にあわせて、八月二十五日~二十七日まで、青木湖畔で水彩講習会を行うが、全国から集まる画家達に、美しい自然はよいモチーフになることであろう。

③(期間中本部)ホテルブルーレク(T.E.F. 0261-23-1111)

安曇野・大町・小谷・白馬にかけては、日本有数の写生地である。この地での開催の意義はきわめて大きいのである。

(石沢 清 日本水彩画会評議員、一水会会員、日本水彩画会長野大町展運営委員長)

座談会

”日本水彩画会 長野大町展“をまえに

出席者

幡野茂道さん 画家 石井柏亭に師事

大町美術会会長

平林多喜男さん 大町市会議員 美術、文化

方面に理解、関心がある 大町市在住

征矢野久さん 画家 日本水彩画会会員

創元会会員(審査員) 穂高町在住

古畑秀子さん 主婦 元教員

趣味で絵を描き楽しむ 松本市在住

飯島紀子さん 主婦 公務員

絵画鑑賞を好む 大町市在住

太田穂積さん 自営業

絵画を愛好する 白馬村在住

司会 石沢清 画家 日本水彩画会会員

水会会員 日本水彩画会展運営委員

大町市在住

同席 平林館長 記録 峯村館員

(六月二一日 講堂において)



美代田から見る朝間山 内藤秀因

石沢 今年新しい方式で特集号を、ということ、座談会で昨年に続いて日本水彩画会・長野大町展の開催について話し合ってもらいました。

幡野 非常に素晴らしいことだと、この一語につきまますね。昨年に続き二回目になりますが、良い催しのでき、触れる機会が多くなれば、その土地の文化は向上する。継続していただけるなら、大町市にとっては最高の恩恵だと思えます。

平林 市の立場から。石沢先生ほかの努力で、他の大都市をさしおいて、この人口三十万の小都市で開催できたということは素晴らしいことだと思えます。

この地の文化の向上のためにも、今後とも継続していただいて、大町ってところでは必ず良い文化的催しが開催されるんだ、という線路をひいていただければと考えます。

征矢野 この展覧会が開催されること自体はもちろんです、地方の小都市ではあるけれども、全国的なレベルの高いものを、しかも海の絵があつたり人物があつたり抽象画があつたりと、多様な種類の絵をみられるということに価値があるので、はないかと思う。

飯島 私が絵を好きになつたのは、小学校のときの担任が美術の先生だつたり、大きくなつてからは石沢先生などに教えていただいた



征矢野



平林



飯島

りと、環境とか、出会いとかそういうもので絵に親しみをもつてみる機会を得てきたためだと思えます。ですから先ほど幡野先生がおっしゃられたように、良いものに触れる機会をできるだけ多く、ということはずごく大事なことだと思えます。

太田 自分としては絵をみるという感覚よりも、その絵が自分に考えさせてくれるとか、感動させてくれるとか、話しかけてくれるような絵が良いんじゃないかなと思つています。私は食べものもあつたりしたものも好きなんです、サラダ的なのが。問いかけに対する答えがさわやかにかえってくるような水彩画を、みじかで見られてうれいしですね。

印象に残る作品 飯島 私が絵をみるときは、好きな絵嫌いな絵というふうにはサツとみておいて、それから、この絵は誰々先生の絵に似ているな、という感じで見ます。例えば今日良いなと思つた石川達三先生の「白馬村」は、ちょっと石沢先生の絵に似ているな、でも石沢先生の絵は最近「カルカッタの廃寺」のああいう感じでちよつとちやうな、というようにいろいろなことを思いながらみているんです。今年のもう一点、田村清男さんの「水に生きるまち」は船のあの帆の黄色がぱつと目に入ってきて、あつ、きれいだな、鮮やかだな、きれいだな、という感じで印象に残ります。



飯島



幡野

石沢 皆さんには昨年、今年とみていただいているので、好きな作品とか。飯島 石川先生の「早春」は良かったですね。先生の絵には、素材が自然というか、土のぬくもりというんでしょうか、心の安らぎを覚えます。幡野 昨年みた作品では、やはり石井柏亭さんの「脇息に倚る女」(昨年の特別出品作)

です。明治の時代にこれだけ正確なデッサンといふ何とない完璧なものでした。完璧といえはこれなんです。これはもうダ・ヴィンチに匹敵するだけの技術のある人ですね。今年のは田村さんの作品。欲しいくらいです。

征矢野 私はさつきもちよつと触れましたけれども、海の絵ですね。今年の作品でいえば、あの田村さんとか、吉田収先生の「船だまり」、それに加藤隆輔先生の「河口の港」といった作品ですね。それから岐阜の秋山文雄先生の「舞妓さん」の絵ね、これも印象ある作品です。それからもうひとつ、都会に住んでいて山をわいてくれている画家の絵というのは印象に残っています。私たちは山にいて山をわいてくれています。着物の肌合いのちがいを感ずるわけです。昨年太田君が求めた大和屋巖先生の「早春白馬岳」などもいいです。

太田 去年の大和屋先生の絵は、石沢先生を通して、いただくことになつたんですが、今年の先生の「残雪八ヶ岳」は少し細かいと思います。遠くからみたり近くからみて、うまくまとまっているな、とは感ずるのですが、



白馬村 石川達三

大づかみでも良いんじゃないかと思えます。あまり細かく写実的な絵は自分に合いませんし、かといって抽象画は、鑑賞する力を持ちあわせていないのでなんともいえないですね。今年からは岡田節男先生の女性像の顔が良いです。それから秋山先生の「豆賀寿さん」も良かった。普通、バックを写実的に描いておもしろいところを、うまく活かして舞妓さんをはきだたせている。それに田村さんの山と海のブルーの関係が印象的でした。

古畑 昨年では阿部広司先生の「南スベイン風景」とか、松島靖先生の「水ぬるむ」などが印象に残っています。今年では岡田先生の人物の絵や、新しいところで田村さんの絵などが頑張っているなと思いました。直感ですのうで当たっているかどうかわかりませんが、こういうって今真近くみますと、ほんとうに水彩彩、っていう感じがします。最近の水彩画は油絵的な重厚な感じのものがかなりあるんですが、重厚ななかにも水彩独特の爽快な明快なリズム感があるんですね。

ガラスに入れて会場にさらしてしまおうとわからないんですが、こうしてみせていただければいいでしょうか。



座談会まえ、作品に見入る皆さん

平林 私は、どういう絵が良くて、どういうのが悪いかはよくわからない。ただみるのが好きだという程度ですが、去年では大和屋さんの絵は好きだった。それから征矢野先生の「安曇野残光」。実は名前をみて今はじめ征矢野先生とわかったんだけど、(一)

同爆笑)：あれは心に残っていますね。今年の絵ではやはり大和屋さんのや、蔵本人先生の「石と岩と流れ」ですか、そういうのは私のような素人にも受け入れやすい作品じゃないでしょうか。でも、ただひとついえることは、どんな作品でも、有名画家だろうと初出品の人だろうとね、作者が精根こめてかいた絵には心がこもっていい。サーッとみてもしまえばわからないけれども。じっくりみるということが大切だと思う。一点一点一作一作をかみしめるようにしていくのがよいように思う。

石沢 ご発言のなかには、今まで考えていた水彩画というものと大分ちがっているというふうな意見もみられましたが、それについて。幡野 材料の進歩というのがあります。だが太田君も古畑さんもいわれましたが、日本人の伝統のなかには「みづぐきがあとるはしく」ということばがあるんです。字を巻紙にくくね、それを「みづぐきがあと」といったんだけれども、水彩画にもあてはまるんです。日本人の本能的ななかにそれがあつた。何か根源的なものだと思う。イタリヤ、フランスの画人は油で絵具をといっている。ところが日本人はなんとなく昔から水で絵具や墨をといっている。これが伝統文化だとい。

征矢野 幡野先生からでた水のはなしですがね、石沢先生の絵も非常に印象に残っている。作品のひとつですけれども、テクスチャー、あいろいろな地づくりもあっていて、水彩画らしくらぬ絵だという人もある。けれどもね、近づいてよくみると、絵具をすーっとたらし水彩画の味をあの複雑な地肌の中に出している。これはやはり油絵では得られない水彩画ならではのものです。石沢 私にしても、インドであの寺院でフレスコ風の作品にふれて、そんなのをやってみようかな、と思ったのが事の起こりなんです。

ですからさつき飯島さんが、小学生のとき絵の先生に会ったといっていましたし、幡野先生もおっしゃったように、こういう機会を通して、それがきっかけで絵が好きになるといのはそのとおりだと思います。それと同じく、作家はどこで何に感動したかが画風と技法の前進になるわけです。その意味でも、本展で新しい技法、作風というものを学んでもらいたいものです。



平林 私たちが小学校のころ習った水彩画は、三原色をつかって、できるだけ写実的に、山なら山、木なら木とはっきり書いていたわけですが、それが今は、幡野先生もおっしゃってましたが、絵具もちがってきいているし、それに技法も昔の水彩画は平面的で掛軸みたいなものでした。ところが今の水彩画は非常に重厚で立体感が出ています。色のだしかたにしても、本当に繊細で緻密で。だから水彩のイメージがガラッとかわっちゃってね、昔の水彩画をみた感じで今のをみたら、これが水彩かなと思ってしまうところがありますね。

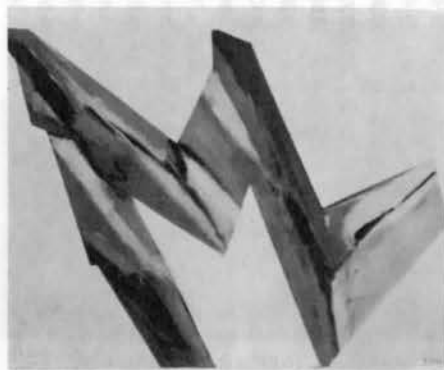


秋の原 田坂ゆたか

太田 私たちも小さいころ絵のかきかたを教わってきたんですが、絵具の濃淡表現のことが多かったと思うんです。濃いところを薄くするには、水を少しつけて伸ばしていったら薄くなるかと。ところが今は一本一本の線の太さのちがいでひとつの絵柄を表現してきているように思います。

飯島 そうですね、今油絵と水彩画のはっきりした区別ってないんです。顔に入っているときはなおさらわからないと思うんですよ。今こうして聞けてみて、やっぱり水彩画だなと感じるんですけど。

幡野 私は水彩であろうと油絵であろうと日本画であろうと、材料がちがうだけであって表現そのものにはかわりないと思うんです。音楽の場合、楽器の表現にはかなり差があるけれども、絵画の場合はほとんどないというか、良いものは良いんです。だから透明水彩の美しさも貴重だろうし、あの不透明水彩の美しいものになると下手な油絵はそばへよれませぬね、ピカッと書いて。石沢 画壇のコンクールは今いっばいあるんですが、そのなかで安井賞展は全画壇にうけとめられている。だからこれがその年の日本画壇の決算みたいにいるのだから、その安井賞展は画材が明示されている。それでわかるんですが、明らかに水性絵具でかいた絵が多くなり、今年も二五%あるわけです。つまり油絵作家も新しい画材として水彩(水性)絵具をどんどんつかってきいている。なぜかという、合成樹脂系の接着材が大変進歩し、油絵の接着材よりはるかに強固で発色も良いし伸びも良い、ということが使われていくわけです。肌に合わないという人もたくさんいます。透明絵具から不透明絵具へ、そして合成樹脂系絵具の使用も多くなってきたのです。飯島さんから、額縁へ入れてあるときはわからないという感想がでしたが、わからないのが多く、日本水彩画会でも特に若い作家のあいだに多くなってきた。



動態 牛尾 弘

征矢野 去年会場において、「これでも水彩画か？」という声がかかりきこえたんですね。どういう絵に対してかという、熊谷文利先生の『祈祷師花札』や平本和夫さんの、ノコギリをかけた『納屋一隅』にですね。熊谷さんのは心の中の風景ですからね、外国人が来たようなものを感じたと思うんですが、水彩画には見えなかったようですね。だから、この大都市でやって、地域の人たちやこれを見に来た人たちがこういう作品に接して、水彩の表現領域の広がりというものをつぶさに感じとったんじゃないかと思うんですね。

古畑 一般の人たちは、水彩は風景とか静物とかをかくものであって、抽象とかイメージをかくことは水彩の範疇ではないという感じをもっているんじゃないか。だからびつくりしてしまうのでしょうか。

征矢野 そうですね。だから目が開かれたと。平林 ですから数多く最先端の一流の絵をみて、現代の絵ってものはこういうもんだ、ということも勉強しなければだめだと感じます。

太田 新しい材料についてですが、私たちはみる側ですが、作家にとってみれば表現力だということですね。表現力に対していろいろな材料がでてきたということであって、私た

ちとしてはどのような結果が材料によってたかということ、最終的には表現力に対してどうかということの問題にしたいです。先ほどの田村さんの絵のように、「これはノコギリドキッとする刺激的な作品があってもよいと思いますね。」

石沢 しかし君は一方で伝統的な水彩画というものもすてがたいのだね。

太田 ええ、もし新しいものがふえちゃったから本来の水彩画的な感覚が恋しくなる、といった気持ちでしょうか。

古畑 個人個人の表現ですからね。材料はなにをつかってよいと思うし、モチーフもなんでもよいとは思いますが、従来かかれてきた中西利雄とか、ああいう人たちのかいた水彩画に対して、やはりある程度郷愁みたいなものを感じるんじゃないかと思えます。私自身そうですから。だから一方ではそういう絵は矢くなくなっていくかと思いますが。

征矢野 制作者のほうからつつけくわえるとね、やっぱり心でかく作品でありたいから、手で描きたいですね。筆とか刷毛とかでね。スプレーとか写真製版とかいう機械力でかくような絵だけはやめてもらいたいと思います。

飯島 私もそう思います。日本建築の白壁の美しさがありますよ。あれが今みなおされていくというのは、そこだと思えます。私たちが京都や、奈良へ何回行っても飽きないし、また行きたいと思う気持ちが「白壁」であり水彩画である気がするんです。だから、それぞれの絵に特徴はあって良いんですが、ほとととする部分が水彩画の良さだと私はとらえてるので、そういうものは大事にしてほしいという気持ちがありますね。

石沢 確かに、日本水彩画会は伝統的な描法を大切にしている面も強いので、そこまできていないが、新しい技術は入ってきてますね。

幡野 だから、純粹っていうのはなんだろうと。もう純粹な水彩画という価値感がかわってらんじやないですか。純粹ってのはその人



白馬冠雪 松島 靖

自身の信じた純粹であって。

石沢 それはいえませんが。だから、偶然性というものには頼らないで、本人がもっている純粹な仕事とか、純粹な心の叫びというようなものをせめて表現していくことだけは、どういふかたちをとつてもいいが、残さなくちゃ絵ではないだろうと思えますね。

今後のためにひとこと

平林 大町でも、こうした催しのできる公共施設が充実してきたわけですが、その維持管理費というものが市民間で問題になってきています。文化の香り高い都市づくりのためにも、また維持管理費の軽減のためにも、この種の催しはどんどん誘致して、こうした施設を利用すべきですね。

征矢野 昨年の日本水彩展に大町市民はどれくらいみにきていましたか。

平林館長 もちろん全員というわけにはいかないが、わりあいに利用はされていましてね。少なくとも絵に関心のある方のお顔はだいたひ見したような気がします。

征矢野 回覧板で知らせるとか、それはやっていきますね。

平林館長 市内PRは、各戸配布の「広報おまち」や有線放送をつかったりといろいろな手段をとっています。

石沢 昨年成功したのは、報道機関の協力も大きいですが、この近辺の民宿やホテルにポスターを配ってあるいたためなんです。街頭に貼ったポスターはあまり役に立たない。これが一番効果あります。

古畑 私どもね、昨年この展覧会をみるために信濃大町駅からタクシーで来たんですが、運転手さんが何度もここへお客さんを運ぶように「なんか今、博物館でとてもいい絵の展覧会をやっているそうなんです」とおっしゃるんです。こうした直接お客さんと接する方たちへのPRも大切だと思いましたね。

飯島 私は長野の信濃美術館などによく行くんですが、行くとき必ず次回のお知らせのポスターをみてくるんです。だからポスターで次の機会を知らせるのは大切だと思えます。観光の面では山岳博物館は市内での重要な足と施設ですが、ここで絵画展を開くということでもさらに魅力が増すでしょうし、大町市民の文化的なレベルアップにもつながるでしょう。日本展は大町では毎年あるんだ、というように、ぜひ続けていただきたいと思えます。

征矢野 今回で二回目ですが、三回やればあとは毎年だというイメージが定着すると思うんです。今年あたりが勝負だと思っておりますので、ぜひこれから継続できる体勢づくりといえますか、せつかく石沢先生が努力してやってきてくれたわけですから、期待がかかるといっていいと思います。

石沢 昨年一ヶ月で二万七千人の入場者がありました。今年は三万人が目標です。どうかご出席の皆さんもPRに助力してください。

山と博物館第31巻第7号

発行所 長野県大町市 TEL 0267-225111
印刷所 長野県大町市印刷部

定価 年額一、二〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号(長野四一三三一九三)